

ボランティアガイドで 自己改革



2007年6月12日大阪城にて

市民の浄財によって復興された大阪城天守閣。悠然とそびえるこの大阪のシンボルを、国内はもとより海外から訪れる観光客にボランティアで案内する人たちがいる。「一期一会の出会いを大切にしたい」。10年前からボランティアガイドをしている澤陽一さんは、訪れた人たちとの交流を楽しみながら大阪の歴史遺産の伝承に務めている。

ボランティアでおもてなし

澤さんが会長の「大阪観光ボランティアガイド協会」は1997年、大阪のホスピタリティの向上を図ることを目的に設立された。これまで6回の育成講座を開講し、現在約100人のガイドが大阪城公園を中心に活躍している。

その顔ぶれは中学校の校長先生だった人や企業の重役を勤めた人、研究者、主婦など多士済済。曜日毎に担当を決め、毎日10～15人程度が公園内に待機し、臨機応変にガイドを務める。何か困っている人に積極的に声を掛けることも任務の一つだ。

「始めのうちは、なかなか声を掛けられない。でもいい年して人見知りしてたってしょうがない。ユニフォームの法被(はっぴ)を着ていると心強く、徐々に慣れてきた。普段でも不自由している人がいたら気軽に声を掛けられるようになったと喜んでいる会員もいる」

自ら切り開いた定年後の人生

製薬会社の研究所勤めを全うし、ガイドに応募。「強制的に歩く機会があれば、自分の健康管理にも何かプラスになる。大阪城公園の緑に包まれた癒しの空間に身を置けるのもいい。始めはそんな素朴な動機だった」。当初の気持ちを一歩ずつ打ち明ける。

と同時に、人との接触の少なかった研究所勤めとは異質の世界に入ったら自分はどう変わるか、「自己改革」への期待もあった。育成講座を経て、いざ足を踏み込んでみると、そこにはグイと引き込まれる未知の世界が広がっていた。

「給料をもらう第二(定年後)の就職と、無給のボランティア。どちらの喜びが大きいかと考えると、直に声が伝わってくるボランティアだと思った。いつも晴れやかな気持ちで帰ることができ、他の仕事では味わえない喜びがある」。自分の選んだ道に確信を持つ。

新境地を楽しむ

活動エリアを徐々に拡大し、今ではキタやミナミなどの地域も案内する。無論、エリアが広がるほどに勉強することも増えるが、「興味を持ったことを突き詰めていけばいい」と力まず楽しむ。現役時代とは読む本も変わり、新たに得た知識や見聞きしたことをいつでも「お客さんに還元できたら」という気持ちで生活するようになった。

「例えば大阪城にしても、天守閣や石垣などについてだけでなく、植物や鳥などについても勉強する。話の接ぎ穂を増やし、お客さんの知識欲を少しでも満たしたい」。蓄えた知識も「押し付けるようなことをしたら駄目。お客さんは勉強しに来ているのではないのだから」と心得る。

「サービス業の素質はないと思っていたけれど、いつのまにか自分が変わってきた。これまでの出会い一つ一つが大事な思い出になっている。ボランティアというのは入り込んだら底なしですよ。充足感に満ちた表情を見せる。

(文・江中咲紀 / 表紙写真・高島悠介)

プロフィール

「大阪観光ボランティアガイド協会」
会長

さわ よういち
澤 陽一 さん



東京生まれ、新潟育ち。門真市在住。大学卒業後、就職で大阪へ。製薬会社の研究所を退職後、大阪観光ボランティアガイドとして活躍。担当は毎週月曜と火曜。ガイドの問い合わせ・予約は電話090(3059)6923(年末年始を除く10時～15時30分)、ファックス06(6944)4346。ホームページからも受け付け。アドレスは以下の通り。
<http://www.octb.jp/ovgc-index/>